

## 第4回 北海道に鉄道は必要か ~住民の交通権を考える~

### 【開催趣旨】

2016年11月18日、JR北海道は自社単独では維持困難と判断される13区間を公表した。関係自治体住民にとってはもちろんのこと、道民全体にとっても、鉄道の意味を改めて問いかけるきっかけとなった。

13区間の公表以後、JR北海道は対象路線の関係自治体を他の地域と切り離し、個別の路線経営問題として議論することを提案している。運賃収入と運営費用の収支問題から議論する限り、人口減少地域では「路線廃止」か「バス転換」となるのは目に見えている。逆に維持する道を選ぶならば、第3セクターを中心とした地域自治体負担による新会社を設立し、住民に鉄道利用を促す政策を求めるだろう。つまり、JR北海道の提案方向は「利用してもいないのに(乗車率が低いのに)残せ」というのは、地域のわがままではないか」という世論受けする論理をベースに地域協議を進めようとしていることになる。

一方、協議を求められている各地域の状況は同じではない。道の鉄道ネットワークワーキングチームも闇雲に「廃止」ではなく、路線の地域特性に応じた政策で地域対応することを提起している。しかしながら、この地域特性も最終的には人口すなわち乗車率の高低によって規定されることが予測され、地域の利用実態(誰がどのような目的で利用しているのか、どのような貨物輸送実態にあるのか等)を十分踏まえて提起されたものではない。

いずれにしても、鉄道が公共交通ネットワークの一翼を占めているとするならば、その公共性は誰が保障するのかが核心的問題であろう。さらに各地域は、他の地域の状況等の十分な情報がないままJR等との対応を迫られる。交渉では情報の少ないほうが不利であり、情報の非対称性も議論されるべきであろう。

このたびの第4回北海道自治体学土曜講座は、「維持困難路線問題と交通権」というテーマで、地域住民にとって鉄道とは何かについて考えてみたい。

### ■ 内 容

#### 第1講 報告

- 1) JR北海道の路線廃止問題の論点 / 武田 泉 (北海道教育大学准教授)
- 2) 自治体が第3セクターによってJR(国鉄)路線を引き継ぐことの意味  
/ 安藤 陽 (文教学院大学特任教授)
- 3) 維持困難対象路線(札沼線)地元住民からの問題提起  
/ 三浦 光喜 (新十津川駅を勝手に守る会・会長)  
/ 宮下 裕美子 (元月形町議会議員)

#### 第2講 パネルディスカッション

- ・パネリスト: 武田 泉、安藤 陽、三浦光喜、宮下裕美子
- ・司会 : 小坂直人 (北海学園大学教授)

■ 日 時 : 9月30日(土) 13:00~17:30 (受付開始 12:30)

■ 会 場 : 北海学園大学 教育会館1階AV4番教室(札幌市豊平区旭町4丁目1-40)

■ 参加費 : 一般1,500円/回(当日受付時)、学生無料

■ 申込不用(直接会場にお越しください)

■ 主 催 : 北海道自治体学土曜講座実行委員会

後 援 : 北海学園大学開発研究所、北海道自治体学会、協賛: 自治労北海道

■ 問い合わせ : [ukazuhir@econ.hokkai-s-u.ac.jp](mailto:ukazuhir@econ.hokkai-s-u.ac.jp) (事務局: 北海学園大学内 内田・斎藤)

電話: 011-841-1161 内線 2737 (北海学園大学経済学部 内田和浩) 携帯: 090-5071-1274 (森 啓)